
俺たちの芸術

中村鉄也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺たちの芸術

【Nコード】

N6111Y

【作者名】

中村鉄也

【あらすじ】

Jリーグのアガリリーヴォ和歌山は、弱さとつまらなさで県民の関心が離れつつあった。そんなチームに個性的な選手が入団し、県民が誇れるクラブになっていく姿を、楽しく書けたらいいなとおもうサッカー音痴のサッカー小説。

いろんなやつらの入団

「お、お前ら。本気で言ってるのか？」

ある高校の校長室から、中年の教師の声が聞こえた。

向かい合って座る2人の生徒は自信満々の表情でうなずく。

「当たり前じゃないっすか！」

と背の高い生徒は胸をはり、

「地元チームがあるなら入って当然でしょ」

と背の低い生徒も笑顔で言い切る。

だが教師と校長。二人の表情は明らかに戸惑っていた。

彼らはこの高校、和歌山県立紀州中央高校のサッカー部のエースと司令塔である。一方対面する二人の中年はサッカー部の顧問と校長というわけだ。3学期になり、彼らの進路について話し合っている最中だった。

若い二人には地元のプロチーム、アガラーヴィオ和歌山からオフアーが届いており、その入団を決めたことを報告したのだった。

しかし顧問は顔を青くして説得を始めた。

「まず剣崎。お前はやめておけ。お前がプロで通じるわけない。2部のリーグだからって甘く見るな」

けんざき・りゅういち

剣崎龍一。背の高い生徒の名前である。ポジションはフォワード。エースストライカーの証である背番号9を背負ったのは3年の春。それまでは試合すらまともに出られないほどの選手だった。

だが不思議と出場した試合は必ずゴールを決め、レギュラーになってからは練習試合ではハットトリックを連発。最後の選手権県予選では6試合で2度のダブルハットトリック（6得点）を記録するなど20得点。本大会でも2得点を挙げた。実質1年未満のレギュラーでの活躍は一時注目の的にはなった。いわゆる「持つてる男」として。

「大丈夫だって先生。俺には必ず点が取れるっていう武器があるんだぜ」

「それを吹き飛ばすほどの欠点があるんだよお前は。ドリブルもリフティングもできないようなやつが、プロで通じるわけないだろう」「でも年末に来た新監督は俺にこういったぜ。『君はワールドクラスのストライカーだ』だって。てことは、俺を必要としてくれてるってことだぜ」

「リップサービスに決まってるだろそんなこと。だいたいあのデンマーク人は海外でも弱小クラブしか指揮したことがないんだぞ。見る目がないんだよ」

剣崎が自信満々にしている出来事は去年。県予選の決勝に進んだ際、新監督のヨハネス・バドマンから直接声をかけられた。その言葉にプロを志望する根源になっていた。リップサービスの部分はあったにせよ、大会後剣崎には和歌山以外のクラブからも接触があったことも確かだ。

だが、大概のスカウトは彼の欠点を聞くなり、引きつった表情で二度とこなかった。なにせドリブルがまともにできず、リフティングというサッカーの基礎にいたっては3回できればいいほど下手。とても目をつむれる次元ではないほど下手だった。

一方校長は背の低いほうを説得する。

「栗栖君。本当に言いのかい？君には浦和や鹿島、ガッツとセルコ
の大阪の2クラブ、名古屋に横浜からもオファーが来たんだろ？2
部にしたって札幌や千葉、AC東京とか昇格の狙えるチームからも
・・・」

「別に名門に行くことが目的じゃないんで・・・。それにせつかく
地元にあるなら地元に入らなくちゃ」

くりす・まさし
栗栖将人。「和歌山県史上最高のファンタジスタ」とたたえられる
ほどのミッドフィルダー。パスの精度はまさに正確無比。さらに変
幻自在にパスを散らす発想力と視野の広さ。ジュニアユース（15
歳以下）、ユース（18歳以下）の日本代表にも選出されるほどの
選手。極端に言えば、サッカー選手としては剣崎と天と地、雲泥の
実力差があつた。

「つーか、むしろ地元の高校が選手を送るのをためらうほどなら行
かなきゃダメでしょ。地元ですら見捨てられてるのなら、僕が入っ
て盛り上げないと」

「でも、君ほどの選手がレベルの低いリーグに行くのは・・・」

「技術は選手の気持ちの持ちようで何とかなるし、2部だからって
代表に選ばれないってことはない。つまり・・・」

「俺たちが入ってクラブを強くすることが一番なんすよ、校長！！」

剣崎が途中割り込んできたが、彼の言葉は栗栖の意思と同じだった。

意思の固い二人にはこれ以上何を言っても無意味。そう悟った顧問
と校長は顔を見合わせ説得をあきらめた。

「じゃ。世話になりました」

「とつとと出て行け。二度とうちのクラブの門をくぐるな!!」

乱暴に扉が閉まった。シオルダーバッグを抱えた少年は、扉を閉めた男を鼻で笑った。

(本当、ここつてくだらねえクラブだったな)

内心、そうはき捨てて少年はクラブを後にした。

彼の名は友成哲也^{ともなり・てつや}。Jリーグのユースの名門、ヴィクトリー東京ユースの守護神だった男である。

ジュニアユースからキーパーとして頭角を現し、日本代表のユニフォームを着たこともあるが、つい最近、トップチームの幹部の逆鱗に触れる行動をとった。

ある日の雑誌のインタビュアーでインタビュアーが「将来はトップチームに昇格して、チームをJ1に導くんですか?」と聞いたとき、彼は信じられない言葉を言い切った。

「こんな眠たいクラブにいてもしょうがないんで、たぶんどっかに行ってます」

一瞬場が凍りついた。インタビュアーが目を見点にしているのに気を止めず、つづけてこういった。

「このチームおかしいんですよ。フォワードは守備ができて満足してるし、ディフェンダーは畳み掛けるときもじっとしてる。こんなくだらない指導受けた選手が上に行っても眠いサッカーしかできないでね。トップチームも選手が取れないなら意識を攻撃的にむけないとダメなんすよ。“伝統”だかんだか知らないけど、昇格したかったらいい加減戦い方を変えないとね」

見守っていたコーチが取材を止めようとした瞬間、悪いことにクラブの幹部が現場を目撃していた。

当然コーチは激しい叱責を受け、あるうことか減俸処分まで受けた。友成も当然謹慎を通告されたが「だったら出てくわ。こんなクラブ」と言い切って謹慎処分を無視して草サッカーに興じた。ほどなく彼はクラブを退団した。道具を取りに来た時に監督に挨拶したのが最初のところだ。

とは言え、友成はどうしようか悩んでいた。たかが17歳（3月生まれ）。東京生まれの東京育ちでアテがあるわけではなかった。かといってクラブに頭を下げる気もさらさらなかった。

「さーてどうしたものかな・・・」

街中を歩いているときにサッカー雑誌「週間サッカーキングダム」が目に入った。シーズン総決算号と書かれたその雑誌をふと手にとり、おもむろにページを開いた。

ペラペラとめくるとアガラー・ヴォ和歌山のページで手が止まった。

リーグ戦18位。42戦10勝12分け20敗。特徴のない成績だった。

所属選手の採点に目をやる。キーパー三人の一年間の総合点は5・48、5・31、5・44。いずれも平均並だった。

その数字を見て友成はほくそ笑んだ。しかもそのうち2人が今季限りで退団することも決まっていた。

「再就職先決まったな」

そついうと本をきちんと元に戻すことなく乱暴に投げ捨てるとコンビニにむかった。

ユースチームを追われた者がいる一方で、トップチームへの昇格を

かなえた者もいる。

「猪口^{いのぐち・たいち}太一君、それから竹内^{たけうち・としや}俊哉君、これが君たちの契約書だ」

書類を提示された2人の少年は目を輝かせた。特に猪口は、目に涙を浮かべていた。すぐに隣の竹内が励ます。

「太一、なに泣いてるんだよ。まだプロになったただけだろ？」

「ご、ごめん……。でも……。ようやく、認められたんだなって思うと……。」

猪口はそう言つて涙をぬぐった。

彼のポジションはディフェンダー、あるいは中盤の守備的な位置、いわゆるボランチをこなす。165センチとかなり小柄だが、スタミナと体幹の強さ、ファウルをとられないスライディングやタックルの巧さがそのハンデをカバーする。しかし、その背の低さが致命傷で彼は京都のジュニアユース時代に退団を余儀なくされ、サッカーを続けたいがために唯一声をかけてくれた和歌山ユースで育った。ここでプロになれなかったらサッカーをやめるつもりでいた。それくらい彼はここでのプロ入りにかけていた。

「でも、その気持ち分かる気がするな……。でも戦いはこれからだろ。プロになるだけじゃダメなんだ」

竹内もまた、他クラブからの移籍組だった。彼は元日本代表FWを父に持ち、浦和のジュニアユースでプレーしていたが、周りは常に同世代の選手ではなく父親と比較した。そんな環境に嫌気が差し、母方の祖父母を頼って和歌山に移りプレーしていた。

「ユースチームでは攻守の要だった君たちがトップチームでプレーすることは大きな意味を持つんだ。ぜひともがんばってくれ」

「はい」

関西国際空港に到着した機内に、アイマスクをしたまま微動だにしない少年がいた。機内の最終確認に回っていた客室乗務員が近づいても、息をしている様子はない。まさか……。客室乗務員に悪寒が走り、慌てて声をかける。

「あ、あの、お客様、お客様。お客様っ!!」

耳を近づけても呼吸音が聞こえない。聞こえるのは耳のイヤホンからもれる音楽だけである。

「た、大変、すぐに人工呼吸を・・・」と客室乗務員がうろたえろと、突然声がした。

「何？ファーストキスがCAからとはうれしいねえ」

「へ？」

「あははは。すみません。ちょっと面白くて息止めてたんすよ」

カラカラと笑って少年はむっくりと起き上がった。完全にぽかんと突っ立っていた客室乗務員は顔を赤らめて促した。

「は、はやく降りてくださいっ!」

「えーと、俺を迎えは誰かなーっ」と

荷物を押しながらロビーに出ると、自分に向かって手を振る女性がいた。女性の手には「内村宏一うちむらひろいち」と書かれた手書きの紙が握られている。その女性に向かって、彼はあるうことかキャリーカーを押して突進を仕掛けた。

「キャー、ストップストップ」

空港内に恥ずかしい大声がこだまする。女性は思わずしりもちをついた。

「あつはつはつは。悪いね。俺のいたずら好きの性分がまた出ちゃった」

まるで子供のような平謝りを見せる内村。周囲の注目を集める女性は顔を真っ赤にして今度は怒鳴った。

「モーツ！！！ヒロイチっていつもそうなんだから！！パパに訴えてやるうゝ」

「まーそういうなって。サヤカ。そういうお前も物好きだな。俺と同じ18なのに、クラブの社員にもらうなんてさ」

「もう、さっさとくる！和歌山に着いたら覚えてらっしゃい」

「へいへい」

いろんなところから、これからアガラー・ヴォの選手となる若者が続々と集まり始めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6111y/>

俺たちの芸術

2011年11月18日11時39分発行